術中迅速診断時において迅速 PAS 染色が有用であった症例

◎恒川 佳未結[1)]、岩田 英紘[1)]、新田 憲司[1)]、水嶋 祥栄[1)]、長田 裕之[1)]、瀬古 周子[1)]、柴田 一泰[1)]
日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第二病院[1)]

【はじめに】術中迅速診断では、提出された新鮮検体で凍結切片を作製し、通常 HE 染色標本で診断される。しかしながら、凍結切片はパラフィン包埋切片と比べて標本の質が劣るため、HE 染色標本だけでは診断が困難な症例も少なくない。今回、術中迅速診断時に迅速 PAS 染色が有用であった症例を経験したので報告する。

【方法】凍結切片薄切時に HE 染色用と余分に 1 枚未染色標本を作製しておく。まず HE 染色標本を作製し、病理医から依頼があった場合に追加で未染色標本から PAS 染色を行った。PAS 染色の染色時間は、1%過ヨウ素酸液 3 分、コールド・シッフ試薬 7 分、ヘマトキシリン液 1 分で行った。

【症例 1】60 歳代男性。胃癌（低分化型腺癌）に対しての胃全切除術において、切除断端評価の目的で術中迅速診断が行われた。食道側断端と肛門側断端が提出され、HE 染色では食道側断端で低分化な癌の浸潤を認めた。追加で PAS 染色を行ったところ、食道側断端に PAS 染色陽性の粘液を有する腫瘍細胞を確認した。肛門側断端は陰性と診断された。食道断端陽性と診断され、追加切除が行われた。

【症例 2】60 歳代女性。胃癌（印環細胞癌）に対して、CT 検査で腹膜播種の疑いとなり、治療方針決定のために術中迅速診断が行われた。腹膜結節が提出され、HE 染色標本では異型細胞をごく少数認めた。癌細胞と断定が困難であったため、追加で PAS 染色を行ったところ、異型細胞は PAS 染色陽性の粘液を有することが確認された。

【症例 3】50 歳代女性。検診で胸部異常陰影を指摘され、CT 検査で結節が認められた。肺癌疑いとなり、右肺上葉の部分切除術が施行され、結節性病変に対して術中迅速診断が行われた。HE 染色では壊死や類上皮肉芽腫を認めたが、細菌や真菌の存在は明らかでなかった。追加で PAS 染色を行ったところ、PAS 染色陽性のクリプトコッカスを認めた。

【まとめ】術中迅速診断時において、PAS 染色が有用であった症例を報告した。腫瘍細胞の有無について診断に迷う場合や真菌感染が疑われる症例においては、HE 染色だけでなく PAS 染色を併せて行うことで、診断精度の向上に貢献できると考えられる。

連絡先－052-832-1121（内線 20744）